

## 第76号 「命と人権」

令和2年6月12日

私はこの数ヶ月、「命と人権」について改めて考えるようになりました。

私事ではありますが、学校としてコロナ対応を迫られていた年度当初の4月5日、施設でお世話になっていた母が急逝しました。社交的だった母には申し訳ない気持ちもありましたが、家族と親族のみでしめやかに葬儀を執り行いました。4月7日に荼毘に付しましたが、90年間頑張ってきた母が、ほんの2時間足らずで骨と灰となり、小さな姿に変わってしまいました。表現が適切ではないかもしれませんが、本当にあっけなく感じたと同時に、人の死および人が生きるとは何なのだろうと考えさせられた瞬間でした。

この度のコロナ対応で最も優先されるべきは、当然ながら「命」です。その命を守るために緊急事態宣言が全国に発出されましたが、医療分野で先進国のはずである日本においても、多くの尊い命が奪われています。そして、コロナウイルスに感染して亡くなった人は、荼毘に付して骨となってからでないで家族の元に帰ることができないとも聞きました。家族の方の気持ちを考えると、やるせない思いでいっぱいになります。

また、著名人を除き、コロナ感染者は死亡者も含めて数字としてニュースで扱われます。仕方のないことだとはわかっていますが、公表される数字にばかりとられるのではなく、一人一人の命の重みに思いを馳せることを忘れてはならないと考えます。

数年前、著書『バカの壁』で有名な医学博士の養老孟司氏と酒を酌み交わす機会に恵まれました。養老氏は、「自分の死、つまり一人称の死は考えても意味がない。彼ら彼女らという縁のない人の死、つまり三人称の死は自分とは無関係だと思って過ごしている。身近で親しい人の死、つまり二人称の死こそ心に残るものである。」と語られました。私は今、この言葉の意味を深く考えています。

我々は子どもたちに対し、「命」を守ることと共に、人が生まれながらに持ち、生きる上で保障されている権利、つまり「人権」を守ることの大切さも伝えていく役目があります。しかし、コロナ禍においては大人も含め、根拠のない偏見や差別が生じている現実があります。未知なるものに対して不安や恐怖を感じることは当然のことと思いますが、そこから生まれる偏見や差別につながる行為は許されるものではありません。教育に携わる者として、政治判断という言葉に惑わされることなく、常にこの意識を持ち続けることが重要だと考えます。人の心に感染する偏見・差別は、必ず防ぐことができると信じながら…。